

私も一度は呼びたかったお父さんと

粕屋郡古賀町 齊藤 ユキ子

私の父は、福岡県筑紫郡太宰府町北谷に、農家の三男として生まれました。

母は、佐賀県三養基郡鳥栖町大字真木に、農家の三女として生まれました。

父と母の出逢いは、二日市の紡績工場だと聞かされておりました。今で言う職場恋愛結婚でした。父は、とても真面目な人で、趣味は宝満山での四季の野山散策だったようです。嗜好品は、ぜんざい、おはぎ、団子、甘い物づくしの甘党でした。母はその反対でトンチがあり、朗らかな人で辛党です。夜寝る時も、ワンカップ一杯「ギュー」と飲んで、熟睡できると喜んでおりました。その母も、現在は、88才で古賀町の北九州古賀病院で入院療養中です。

戦地に行く前の父の職業は、志免炭坑の運搬班だったようです。住居は志免炭坑の5坑の長屋でした。昭和20年6月30日、時刻不明、中華民国湖南省羽湯縣に於て戦病死でした。昭和20年、私は小学校1年生入学でした。父の顔を知らないで成長しました。後日、戦友上官の方が訪ねて来られ、戦地での一部を話されました。母との出逢い、三人の子供の事、宝満山の春夏秋冬の事、思い出等をしょっちゅう話していたそうです。どんなにか故郷を思い、愛していたかが解りました。もう一度、日本の土を踏みたかったと思います。

父の死後、母は志免鉱業所の本部で約20年間働きました。業務は雑役でした。鉱業所での人員削減、配置転換等で、年とってから肉体労働の方に変わり大変だったと思います。けれども、愚痴一つ言わず一生懸命働きました。母は、土曜日の夜は本部の宴会とか、マージャンとかの手伝いに行っておりました。歌や踊りも上手で、皆に愛され、引っぱりだこの母でした。帰りにはお菓子や果物折箱等、沢山のお土産が有りました。

私と兄は寝ずにお土産を待っていました。兄は「俺が大きくなったら、こんご馳走をたらふく食べさせてやるからな」と、子供心に私に言っておりました。母の給料日は20日でした。母の給料日には森永のキャラメル、あみだくじで当たったきんつば、お菓子が沢山風呂敷に入っていました。私達にとって20日が一番楽しい日でした。

父の出征時、妹は母のお腹にいましたが、昭和17年にジフテリアにかかり志免国鉄の病院で死亡しました。母は、何度か出産しましたが子宝に恵まれず、兄を養子にもらったそうです。私達の衣料は、父母の着物が洋服に早変わりしました。父の国防色の作業衣が、兄の洋服に。私の入学式の洋服は、セルの生地でワンピースが仕立上がりました。他に隣り近所の人のおさがりを順次もらい受け継ぎました。盆踊りのワンピースには、絹の着物が利用されました。私は、それを着て嬉しかったこと。町内の広場に集まり、やぐら太鼓を囲み、うちわを持って、いつまでも踊りました。天竺木綿は、色は黒いが、洗えば洗うほど白くなるので、枕カバー、敷布、包帯にと利用したものです。ネルは、少し毛羽立っていて、「クーン」と匂いがして、身も心も暖たかくなる感触の代物でした。下ばきに、ねまきに利用価値のある存在でした。

私達の食生活は、コウリヤン飯、アワ飯、さつま芋飯、大根飯、麦御飯といろいろ食べたものです。唐芋、カボチャの団子汁は、いやというほど食べたものです。米も配給で、色も黒く、一升びんに入れて、棒でつついて白米にしたものです。パンのできるイーストの匂いが、何とも言えない宝物でした。コッペパンの美味しかったこと、忘れることができません。今でもコッペパンが大好きな私です。私が一番思い出に残っているのは、兄がいつも私の弁当箱を開けて見るのです。私の中には良い物が入っているのではないかと思ったのでしょうか？。陽気な母もこの事には大変心配したようでした。これも食糧難ではの仕業だったのでしょうか？。米泥棒にも会いました。野菜はどここの家も前に畑を作り、トマト、胡瓜、なすび、唐芋、とうもろこし、砂糖きび、あらゆる野菜を植えておりました。特に南瓜は棚を作り這わせておりました。「ぼうぶら」と言っ、長い南瓜ができました。おやつ替りに、砂糖きびはよく食べたものです。歯で皮をすごきながら、むしゃむしゃと甘い汁を吸い、繊維物を吐き出したものです。

住居は長屋で七輪をおこし煮炊きをしました。おくどさんが有り、こえ松とたきもんを使い鉄釜で御飯を炊きました。おこげ御飯ができて塩を少しふり、美味しく食べたものです。七輪で魚を焼いたり、思い思いのおかずができあがり、「あんた方今日は何のおかず」、「うちん方はこのおかず」と言っは交換したものです。米、味噌、醤油、足りなかつたらすぐ隣り近所に走ったものです。病気だといえは薬を持ち寄り、急病と言えは、リヤカーで志免国鉄の病院に運んでもらいました。回覧板を持って行っはあがり込み、お茶を飲んだり、話に花を咲かせ、ちよつとのつもりで鍋をこげつかせたものです。

向こう三軒両隣り、人と人とのつながりを大切にしたものです。穏やかな生活の中にも、空襲時下においては、防空頭巾、モンペ、救急袋にいり米、カンパン、水筒、薬、懐中電燈等は、欠かせない必需品でした。就寝前には、身の回りの物一切を枕元に置きやすめました。電気には黒い布をかぶせ、灯りのもれるのを防ぎました。無気味なサイレンが鳴る度に、防空壕に走ったものです。「今博多が燃えよう」防空壕の中で人々のどよめきを、ぶるぶると身体を震わせ固まっていたいました。大勢の人が博多の方角を指して呆然としていました。

今、戦後50年振り返ってみますと、長いようでも短かつた月日。勉強勉強と言われることもなく、戸外で日の暮れるまで、伸び伸びと遊んだ日々。楽しかつた子供の頃だけが、思い出されます。物資にも恵まれ飽食の時代にありながら、何か一つ足りない物があると思ひます。今後も、それを良く見極め、生活するのが大事だと思ひます。子供達、孫、と明るい日本社会であつて欲しいと思ひます。二度と戦争のない国であつて欲しいと思ひます。私も一度は呼びたかつたお父さんと。